

連載

司書・司書教諭が知っておくべき 学校図書館のための情報リテラシー

最終回 学校図書館だからできること

日本女子大学 家政学部家政経済学科 准教授 後藤敏行

生徒の情報リテラシーを高めるために、学校図書館スタッフも含め、関係者が念頭に置くといいかもれないことを、文部科学省の情報活用能力調査の結果をもとに本連載第六回で述べました。教員と生徒の関係を良好にすること、メタ認知的な学習習慣を身につけさせること、コンピュータやインターネットは将来の仕事や勉強に役立つと動機づけること、インターネット上のルールやマナーへの意識を高めることが挙げられました。

最終回の今回は、生徒の情報リテラシーを高めるために、ほかならぬ学校図書館だからこそできることを述べたいと思います。人や予算には制約があるので、学校図書館でなくともできることより、学校図書館だからこそできることを考えるほうが図書館のアピールや、学校全体の活動を効果的・効率的にすることに繋がると思われるためです。

参考になる研究に、庭井氏による一連のものがあります^{※1}。庭井は、情報活用能力育成における図書館利用指導(図書館を含むさまざまな情報源)の効果的利用に必要な知識や技能(情報リテラシー)の修得を目標とする種々の活動^{※2}の独自性や意義を論

じるために、中学校の教師用指導書から、情報の探索と利用に関する指導内容を示す記述を抽出し、図書館利用指導の内容と比較しました^{※3}。その結果、図書館利用指導で取り扱う知識・技能は、①教科でも同じように取り上げられているもの、②一部が教科でも指導されているもの、③教科では取り扱われていないものの三つに分類できることがわかりました。今回のテーマである、学校図書館だからこそできることを考えるうえで非常に有益ですので、この研究をさらに見ていきます(著者から許諾を得て、要約して紹介します。許諾をくださったことに感謝申し上げます)。教師用指導書や、図書館利用指導の内容(司書教諭養成科目のテキストブックなどから抽出)は研究実施当時のものです。

①に相当するものは全体の二三・五パーセントでした。このことから、庭井は、「既存の利用指導体系や基準を見直し、これらの項目を利用指導として取り扱う妥当性を再検討する必要がある」と述べています。一方、②に相当するものは全体の四七・二パーセントでした。例えば、「課題を明確にする」という学習活動において、「既存の知識を確認する」、

「問いを立てる」、「小さな問いを立てる」、「仮説を立てる」という内容は、国語科や社会科、理科でも取り上げられていました。ところが、「キーワードを挙げる」という指導については、課題を明確にするためにも、必要な情報を探すためにも、図書館利用指導においては必要なものと考えられている一方で、どの教科の指導書にも記述がありませんでした。庭井は、②に相当するものについて、図書館利用指導と教科教育の内容を比較すると、「主に、情報を見つけて出し記録するために用いる知識・技能が、教科ではあまり取り扱われていないことが分かった。具体的には、図書館で情報を探すためのさまざまな手順や方法、情報を収集するために利用できる多様な施設、情報源の多様性とそれぞれの特徴、図書等印刷資料から必要な情報を探し出す技能、図書以外の多様なメディアの利用に関する知識、情報を評価するために参照すべき事項、情報を記録する方法やルールなどである」と述べています(強調筆者)。

そのような知識・技能は、各学習活動において不可欠なものである可能性も、中学生にとっては発展的なものである可能性もあります。仮に前

者であれば、既存の教科の内容だけでは指導が不十分であり、図書館利用指導は、「学習活動のなかで、独自の指導領域を有しており、教科と役割分担することによって、情報の探索と利用に関する指導に貢献することができると指摘しています。

③に相当するものには二種類あり、

ひとつは、「指導書を見る限り、情報を活用した学習活動が想定されているにも関わらず、必要な知識・技能の指導について言及されていない項目」でした。「例えば、単元のなかで新聞記事を探して利用する学習が想定されていても、新聞記事データベースや縮刷版の利用法が指導されない場合、生徒が必要な新聞記事を自ら見つけ出すことは難しい」と庭井は例示しています。前述の②と、③のひとつめから、庭井は、「利用指導が、教科の枠組みを超えて扱っている主な内容は、多様なメディアを利用することや、必要な情報を見つめることなど、情報収集の過程で求められる知識や技能が中心であることが分かる。「中略」例えば、国語科は、「話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと」を指導の対象としており、与えられた情報を解釈したり、それらを用いて書いたり話し

たりする能力を育むことに焦点を当てている。このように、現行の教科の枠組みでは、多様な情報源から必要な情報を探したり、それらが必要な形に加工したり、記録したりするために必要な知識や技能が取り上げられにくい」点を明らかにしています(強調筆者)。

③のふたつめは、「文献リストを使って資料を探す」、「自館にはない資料を探す」、「雑誌記事を探す」など

でした。③は、二種類の合計で、全体の二二・六パーセントでした(なお、①②③のほかに、教科の内容と比較できず、分析の対象から外した項目が六・七パーセントありました)。③のふたつめのような学習活動で求められる知識・技能は、「中学生にとっては発展的な内容であり、学校で必要な機器やツールを用意することが難しいがために、教科で取り上げられていないと考えられる」と庭井は述べています。同時に、「総合的な学習の時間で行う探究的な学習では、このような知識・技能が求められることがある」とも指摘しています。

以上を踏まえて、「利用指導で取り扱おうとする知識・技能のなかには、教科の枠組みでは指導されないものがある。学校図書館独自の指導

領域といえるこれらの項目は、各教科や探究的な学習で求められる知識や技能の一部であることから、学校図書館担当者や教科教員が協力して指導にあたることは意義がある」と結論づけています(強調筆者)。

おわりに

連載第一回で次の例を挙げました。

「お母さんが、なんだか聞いたこともない、難しい病気になってしまった。病気のことを知るには何を調べたり、読んだりすればいい?」

「病気のことについて書いてある本が何冊もあったけど、『この治療法がよい』とか『いや、その治療法はダメだ』とか、本によって書いてあることが違う。何を信じればよい?」

「病気のことは大体わかったけど、お母さんも動転しているみたいだ。どう伝えたらいいだろう?」

情報リテラシーを備えていれば、病気のことを調べたり、治療について説明するのに役立ちそうです。しかし実際には、「治療法があり、ちゃんと病院に通えば治る見込みがある」とどれだけ理路整然と説明しても、動転しているお母さんの耳には届かないかもしれません。あるいは残念なこと、お母さんの病気が完治し

ないかもしれません。つまり、情報リテラシーは、かなり有用ではありますが、それさえあれば身に降りかかってくる問題をすべて解決できるとまではたぶん言えません。

さらに言えば、そもそも、情報リテラシーを身につけるのは簡単なことではありません。「将棋やフィギュアスケートには特別な才能や努力が必要だが、情報リテラシーなら誰でも手軽に習得できる」のようにも考えるとするれば、それはやや極端です。本連載で見えてきたように、初等中等教育の段階から情報リテラシーを涵養する必要があると叫ばれて久しいことや、情報リテラシーに関する学術研究が国内外で多数存在することは、その育成が容易ではないことの裏返しでもあります。

しかし、あれば生徒自身の大きな力になりますので、学校図書館としてもぜひ、情報リテラシーの学びに貢献したいところです。本連載はこれで終わりますが、その一助となれば幸いです。各回は、筆者の所属大学の機関リポジトリ (<https://ju.repo.nii.ac.jp/>) にPDFファイルで登録し、インターネット上に公開しています。何かの際はそちらも参照ください。

※1 庭井の調査上、上へを列挙するとはきませんが、例えば次の研究があります。著者名同氏を力してCiteSpace And Gephiを用いたネットワーク分析。①庭井忠雄「教科による情報活用能力育成と図書館利用指導」の比較・教師用教科指導書の記述を手がかりとした新「教育情報研究」10(1)年、vol. no. 4、p. 314 <https://www.waseda.jp/academic/research/article-detail/>。(参照2019.12.09) ※2 日本図書館協会学芸情報委員会編「図書館情報学用語辞典」第4版、丸善出版、10(1)年、p. 133。 ※3 以上、※1の①の研究を要約して紹介。 ※4 以上、※1の②の研究を要約して紹介。